



ゲート SEASON2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

2. 謀濤編〈下〉

α L P H α L I G H T

柳内たくみ

Takumi Yanai

アルファライト文庫



Main Characters 主な登場人物



シャムロック・ハ・エリクシール

ティナエ政府
最高意思決定機関
『十人委員会』のメンバー。



ケミィ

海で暮らす
アクアス族の女性。
人魚のような特徴を持つ。



徳島 甫
とくしま はじめ

海上自衛隊二等海曹。
特務艇『はしだて』への配属
経験もある給養員(料理人)。



メイベル・フォーン

亜神ロウリィとの戦いに敗れ、
神に見捨てられた亜神。
徳島達と行動を共にする。



ヴォー・ド・ヴィ

ティナエ諜報機関
『黒い手』の一員。
プリメーラの船に乗り込む。



オデット・ゼ・ネヴユラ

翼皇種^{アグレイ}の少女。
戦艦オデット号の船守り。
プリメーラの親友。



江田 島五郎
えだしま ごろう

海上自衛隊一等海佐。
情報業務群・特地担当統括官。
生粋の“艦”マニア。

その他の登場人物

エドモンド・チャン 特地碧海で行方不明となったジャーナリスト。
くろかわ まさあ
 黒川 雅也 海上自衛隊の潜水艦『きたしお』の艦長。
くろかわ まり
 黒川 茉莉 二等陸尉。中央病院勤務の看護師。
 アマレット プリメーラ付きのメイド長。
 シェリー・ノーム・テュエリ 伯爵令嬢。菅原家に寄宿している。
すが わら こうじ
 菅原 浩治 日本の外務官僚。
ちんづき ゆりこ
 望月 紀子 かつて帝国に拉致されていた女性。
 イスラ・デ・ピノス シャムロックの秘書。



シュラ・ノ・アーチ

帆船アーチ号船長。
正義の海賊アーチ族。
プリメーラの親友。



プリメーラ・ルナ・アヴィオン

ティナエ統領の娘。
極度の人見知りだが酒を飲む
と気丈になる『酔姫』。

特地アルヌス周辺



●ロンデル

帝都●

●イタリカ

○アルヌス

碧海

エルベ藩王国

グラス半島

トュマレン

アヴィオン海

碧海



09

プリメーラ達の東京滞在の日々が始まった。

シュラは東京からバーサまで一時退却することを提案したが、結局はプリメーラが自分の希望を押し通し、オデットが退院できるまでプリメーラ、シュラ、アマレットの三人が交代で病院に通うことにしたのである。

もちろん東京滞在の宿は、徳島家所有のマリンジェム号である。海運国に生まれ育った三人には、船上生活は全く苦にならないのだ。

「じゃあ、今日はボクがオデットに付き添うことにするよ」

サロンで朝の食事をとっていたシュラが口元を拭きながら言う。彼女は船を失ったものの艦長としてリーダーシップを発揮して皆を仕切る役目を引き受けていた。

すると、給仕をしていたアマレットが同行しようと言いつつ、

アヴィオン海周辺



「ダメだよ、アマレット。君は長く働いていたんだからしばらくは非番だ」

「でも、あの病院でのしきたりなどをお伝えしておいたほうがいいかと思いますが？」

「ダメダメ。そんなことを言いながら君は働こうとするからね。初めてでも大丈夫さ、分からないことがあったら、あのおつかない看護師に尋ねるから」

シユラは言いながら笑った。

オデットとメイベルの間で勃発した戦いを、毒舌含みの鋭い啖呵で鎮めた長身看護師のド迫力に、シユラは一目惚れしていた。もとよりシユラ自身もきっぱりはつきりしたタイプの人間ということもあって、看護師に対するシンパシーがたちまち生まれたのだ。

「そうですか」

シユラに同行を拒否されたアマレットは、少しばかりがっかりした気分になったらしい。非番を言い渡されてもどう過ごしたらいいか分からないくらい仕事中毒なのかもしれない。

アマレットはしばし逡巡していたが、今日は衣類の洗濯、整理、マリーンジェム号の掃除、そして買い物をする^{しゅんじゅん}と申告した。

「さすがに衣服もこのままという訳にはいきませんので」

「当然ね、オー・ド・ヴィ。アマレットにお小遣いを」

「かしこまりました、プリメーラお嬢様」

サロンの窓近くで従者として立っていたオー・ド・ヴィが恭しく一礼した。

「そういえば君はどうするんだい？」

シユラはオー・ド・ヴィに尋ねた。

「私は、本日はプリメーラお嬢様に伺候する予定です」

プリメーラの予定はまだ聞いていなかったが、その一言でシユラは彼女の本日の行動予定を理解した。プリメーラが何故、自分達にとつて生活しやすいバーサよりも東京での滞在を選んだか、その理由は既に聞かされていたのだ。

「そっか、プリム。今日から動き始めるんだね」

「はい。一日だつて無駄に出来ませんもの。オデイが無事な様子も確かめられました。ならば、これらのことを考えた行動を始めます」

プリメーラはそう宣言すると、口元を手巾で拭き、出かけるために立ち上がったのだった。

* * *

「ふーん、プリムはそんなことを考えているのか？ シュラはいいのか？」

病衣のオデットは、自分の座る車椅子を不器用に押すシュラを振り返った。

「ボクとしても彼女の思いは尊重したいからね。好きにさせてあげたいんだ。プリムが自分を鬱々^{うつうつ}と責めているのを見るのはボクもつらい」

シュラはプリメーラが罪責感に囚われて苦しんでいることを告げた。

「だったら前向きに何かやろうとしているほうがよっぽど心にいいように思えるんだ。危険なことが起こると思えないし。それにこの国がどんなところなのかを知っておくことは悪いことではないしね」

二人の傍らには、何もかもが初めてのシュラのために、看護師の黒川茉莉^{くろかわ まり}が付き添っていた。

特地理解する黒川は当然、二人の会話も理解できるのだが、あえて口を挟むことなく黙っていた。しかしシュラの押す車椅子が、オデットや他の患者にとって危険だと思われた時——例えば病棟の廊下を歩くよりも速く進もうとしたり、曲がり角を無警戒に進んだり、前を歩くお年寄りが遅いからと無闇に追い抜こうとしたり——は、二度としないよう厳しく言い聞かせたのである。

「杖を突いたお年寄りを引っかけて転ばせたら死に直結するかもしれません。人殺しと



罵られる覚悟は出来ていますか？」

「ボクも戦いの中に身を置いているから敵から恨まれる覚悟はとつくの昔に出来ているけれど、そういう理由で罵られるのは嫌だ」

「では、ここでは神経を張り巡らせてください。貴女よりも弱く、壊れやすく、傷つきやすいものだらけなのです。いいですね？」

「うん、分かった」

そんなことを言いながら、三人の向かった先は理学療法室であった。

「ここは？」

「訓練のための場です」

シュラが見渡すと、そこでは何人もの患者と専門家が訓練に勤しんでいた。

平行棒の間に立って歩行の練習に励む者。

床に腰を落とし、段差のあるプラットホームへと身体を持ち上げる動作を額に汗しなから繰り返す者。

自分の身体なのに動かすことが出来ない。ただの重りと化した下肢を引きずり、ベッドから椅子へと渡る恐怖と戦っている者。

指先の器用さを取り戻すため、拷問とすら思える単調な作業をひたすら繰り返す者。

ここにいる者の多くは、それまで何気なく当たり前に行えていたことが突然出来なくなってしまう者ばかりであった。

理由は事故や病気と様々ある。そして肝心なのは、誰もが前向きにそれらを克服して元の生活と人生を取り戻したいと励んでいるとは限らないことだ。こうなってからまだ日が浅く、自分の身に起きたことを受け容れられていない者も少なくない。

中には、失ったもののばかりに目が行って、残った力をどう活かすかなどまったく考えられない者もいる。誇りを失い、明日に希望を抱けない者もいる。

しかしそれでもとりあえず、場の雰囲気や、家族の思いや、しなければならぬからと自分を納得させて、訓練に向かっているのである。

そんな内容のことを黒川は、異世界人のシュラのために、なるべく専門用語の使用を避けながら丁寧に説明した。特地とことは、医療技術はもとより、人生に対する感じ方も考え方も異なるのだ。

「今申し上げたことをしっかり記憶しておいてください。そうすれば、他者に接するに当たつての留意点も、自然と分かってくるかと思いますが」

黒川の言葉にシュラは頬を引きつらせた。

「ちょ、ちよっと難しいかも」

「いいことです。分かったと安易に答えたら、耳元で百万遍馬鹿者と囁いてやるつもりでしたので、とりあえず合格とします。では心得をたった一つだけ。無邪気な善意の押しつけをしない。それさえ弁えていてくだされば結構です」

黒川はそれ以上のことは期待しないと告げた。

そんなことをしている間にも、オデットは柔軟体操を終えて義足の装着を始めた。

「あれ、なに？」

シュラは、オデットが装着する鈍色に輝く金属製義足の無骨さに眉根を寄せた。

「訓練用の義足です」

「そっか、これがこっちの世界の義足なのか……」

海で生活していれば、腕や足を負傷して障害を負う者も少なくない。だからそうした障害を補う道具を目にする機会も多いのだ。そういった道具は木製で、ただの棒かあるいは鈎だ。それに比べたらこの世界の義肢は遙かにマシなのだが、それでもその無骨な外見のものを可憐なオデットが着けることにショックを受けてしまう。

「ボクがもっと上手く艦を指揮できていたら、こんなことにはならなかったのに……」

シュラはやりきれない表情をした。

オデットがこうなったのは全て自分の責任だとシュラは感じている。そしてそれは概

ね事実であった。船では全ての権限は艦長にある。従って船を失い、乗組員達を失い、そしてオデットが回復のしようがない傷を負ったこともまた、艦長たるシュラの責任なのである。

「言ったところで始まらないのだ。シュラはこれから頑張ればよい」

だからオデットも気休めにならない慰めは口にしない。前だけを見て後ろを振り返らないオデットの習熟した手つきを見たシュラは、オデットはこちらにきてから全く時間を無駄にしなかったのだと悟った。

やがてオデットは翼を大きく広げると、その力を借りて立ち上がった。

「おっ、オデットちゃんだ」

「おおっ凄いい」

「天使様？」

オデットの翼を広げた姿は、理学療法室で実によく目立っていた。

もちろんオデットは自分の存在をアピールしたくて翼を広げている訳ではない。しかし彼女が純白の翼を広げた姿には、他の患者達はそれぞれ感じるものがあるらしい。子供は無邪気に喜び、眉間に皺を刻んで訓練に向かっていた者も表情を綻ばせた。

「今日は、翼の助けなしで立つてもらいます」

オデットがこれまで出来るようになったことを復習すると、理学療法士がやってきて告げた。もちろん彼らは特地の言葉を解さないで黒川が通訳している。

「えっ！ 翼、使っちゃダメなのか？」

「翼を広げる余裕のない浴室内とか、狭い廊下とかで転んだら、立ち上がれないままですか？」

「……」

そう言われると、オデットは肩を落として翼を畳んだ。そして再び床に腰を下ろす。そして他の患者と同じく、体幹のバランス感覚だけでその場に起立する練習を始めたのである。

* * *

東京、駐日帝国大使館――

銀座事件に端を発する『異世界戦争』を、日本と講和を結ぶことでなんとか収めた帝国政府は、日本と友好的な関係を構築すべくアルヌスに領事、そして東京に大使を派遣した。そして日本および銀座側世界の主要国との外交活動を精力的に開始した。

とはいっても何も日本政府の要人と毎日顔を突き合わせて話し合っている訳ではない。日本側要人も帝国との関係ばかりに捕らわれていられるほど暇ではないし、それだけで関係の改善が図られる訳ではないからだ。

国と国の付き合いは、要するにその国民との付き合いだ。国民の感情と乖離かいりした関係の追求は、政府に対する国民感情の悪化に繋がる。民主的な選挙を経て代表が選ばれる国では、それは政府支持率の低下として速やかに表れてしまう。

従って、帝国としても日本国民の自国に対する感情を好転させる努力が必要となるのだ。

さらに言えば、国と国との交渉は人間関係が基本だ。国交といっても行き着くところ人間と人間が顔を合わせて交渉することになるからだ。

そのあたりは企業と企業の商談と同じ。人間と出会って関係を構築し、それを元にしてそれぞれの国や諸組織が持つ相手へのニーズを、「こういうことが起きてるんですが何とかしてくだいませんか？」と提案したり、「もうちょっと配慮してくれるとうちの国の企業が仕事しやすいんだけど」と協力要請したり、政策的な配慮が成されるよう働きかけることになる。そしてこちらの言い分と向こうの言い分とカードを出し合って、「このカードなら呑めるから、こっちのカードを受け容れてくれ」と駆け引きしていく

のである。

大使館とはつまり、そういう人間関係構築の拠点なのである。

そのために必要なことは、相手国で合法とされる範囲で何でもすることである（非合法なことでも必要ならする国も時々ある）。

一番簡単なのは、人を集めるパーティーや催しを行うことだ。

一人ずつ会っていたら面倒だし時間もかかるが、大勢を一度に集めればせっかく知己を得た人々と疎遠になることを防げるし、あるいは新しい人間関係も獲得できるのである。

もちろん宴に呼ぶ客は誰でもいいという訳ではない。予算だつて無限にある訳ではないからだ。従つて懇意な関係を築くならば、政府や組織の意思決定に様々な力関係が働く中で強い影響力を持つ者に絞りたい。

ただ、厄介なのは人物の肩書きには実際どんな力がありますよと書いていないこと。

そのために情報収集と分析が必要だ。今、目の前にいる人間が持っている影響力はどのくらいなのか。今はそれほどでないとしても、将来強い影響力を持ちそうか。それらをよく見極めなければならぬ。そしてそうした人物に、『面白そうだからちよつと出向いてみようか』と思わせる工夫をしないといけないのだ。

その一つが、本日執り行われる騎士団創立記念のパーティーであつた。わざわざ本国から騎士団の一小隊を招き、派手な儀式を行うことになっている。

「準備は出来たかね？　騎士団の方々は？」

帝国の駐日大使、グレンバー・ギ・エルギン伯爵は帝国の正装に身を固めると、参事官にして親友でもある魔導師アー・ド・モアに準備の進捗状況を尋ねた。

「はい、大使閣下。会場、人員、料理、全ては準備万端整っております」
すると彼の親友は恭しく頭を垂れた。

「そうか、なら安心だな」

グレンバーはその美貌を満足げに輝かせる。だがそこでアー・ド・モアは首を傾げた。「でも、騎士団の創立記念式典なら本国でも行われております。わざわざ遠い異世界まで来てする必要なんてないでしょうに？」

「分かつているさ。だが二ホン人にはなかなか人気のある行事だからね。そういったことも疎かには出来ないだよ」

日本という国は身分制度がないわりには、天皇という君主ならぬ象徴が君臨しているためか、貴族というものに對して一定の敬意を払う精神性がある。

また、貴族階級の子女によって編成された騎士団の団員達が、煌びやかな軍装をま

とって儀式に臨む凛々しい姿には、有力者の妻子も強い憧憬心を露わにする。騎士団の主立った者など、演劇役者でもないというのに個別のファンがいるくらいなのだ。

当人達にとっては複雑な心境だろうが、とはいえそれならばそれを武器としない手はないのである。

さらに言えば、もう一つ武器になる要素が帝国にはある。それは大使である彼自身であった。グレンバー・ギ・エルギンはエルフ、エルギンの森部族の族長なのだ。

そもそも彼が大使として登用されたのも、彼の能力や見識が認められたからでもなければ、宮廷内政治的な力関係がどうこうといった複雑な力学が働いたからでもない。全ては銀座側世界の住人達が抱いている、亜人種族への好奇心と憧憬心を利用するためなのだ。

それが本当ならば、随分と他人を小馬鹿にした理由であり、グレンバーもその事実を知った時は嘔然とした。自分の精神がひねくれているから、過剰に被害者意識を抱いてしまっているのだと自らを疑ったくらいだ。しかしそれは、被害妄想の入り込む余地のあるものではなかった。なにしろ女帝本人の口からそう聞かされたのだから間違いないのである。

女帝は宮廷に召し出したグレンバーに勅任状を手渡す際、こう告げた。

「我が帝国に対するニホン人の印象はすこぶる悪い。帝国の兵がギンザの地に突如として乱入し、多くの民草を戦禍に巻き込み殺めたのだから当然と言えよう。しかし講和を結び、これから親しく誼を結ぼうと約定を交わしたからには、悪印象をそのままにしておく訳にもいかぬ。大使としてニホンに赴く者には、その悪印象を払拭するという重い任務を担ってもらわねばならぬ。そのために卿を登用することにした。理由は他にもない、卿がエルフだからだ」

大使として赴任する者は、帝国に攻め込んだ軍人を思わせるヒト種男性や、ゴブリンやオーガーといった怪異を思わせない姿形であるほうがよいというのである。

「……もちろん別の理由がない訳ではないが、それが主たる理由だ。いいな？」

女帝はコホンと咳払いしつつそう念を押した。

これを聞いたグレンバーはしばらく愕然としていたが、やがて開き直ることにした。

そういうことが理由ならばと、東京に開設した大使館のスタッフには、親友アー・ド・モアを指名し、武官、書記官、理事官も徹底的に亜人と女性、そして魔導師で固めたのだ。もちろん帝国人ヒト種男性もいるが、それは情報活動とか裏方任務に従事する者に限った。

おかげで大使館は、訪れた日本人および他国人が「浦安のねずみーらんどみたい」と

囁くような環境になったのだ。

帝国に対する悪印象を抱えて大使館にやってきた者も、手のひらに乗りそうな妖精に迎えられれば驚き、少なくとも悪感情を面と向かつてはぶつけにくくなる。とりあえずは冷静に話し合うという姿勢になるのだ。

「ところでエルギン閣下……」

魔導師アー・ド・モアは端整な表情を崩すことなく大使の名を呼んだ。

「閣下はやめてくれよ、君と私の仲ではないか？」

「だが公私の別は付けないとね、ちよつと気が緩んだ時に、普段の癖が出たら大変だろう？ 特に大勢のお客様や部下達がいる中で、君と僕の関係を勘ぐられるのはいささか問題だ。だからこれは君が慣れるべきことなんだ」

関係を勘ぐられたくないと言いつつも、二人の青年は同性同士としてはやや近すぎる距離で話している。それが、執務室の壁際に控えている想像力豊かな武官を筆頭に、秘書、書記官の女性達にたつぷり楽しまれていることにも気付かず彼らは話を続けた。

「で、一体何の用だね？ アー・ド・モア参事官」

「閣下はアヴィオン王国という国を知っているかい？」

「寡聞にして知らない名前だ。こちら側の世界には、実に多くの国があるからねえ。た

しか一九五ヶ国だったか？」

「ニホンという国が承認しているこちら側の国は、一九六ヶ国。他には未承認の国が二〜三あるはずだ」

「聞く度に驚きを禁じ得ないよ。この世界では、とりあえずそれらの国がどこにあるか、何という名なのか、情報が整っているのだからね。そしてその情報のほとんどを、このトウキョウにいながらいつでも引き出すことが可能。高度情報社会、畏怖すら感じるよ。で、そのアヴィオンがどうかしたのかい？ 例によって、我が帝国との交流を求めて接触を図ってきているのかい？」

「いや、実を言えばアヴィオンは我々の世界の国だ。私も知らなかったもので、麗しき一等書記官殿に尋ねたら、知識豊富な彼女は、碧海の中央部にあった島国の名前だと教えてくれた。帝国の名目上の属国の一つだったそうだ」

『名目上の属国』というのは帝国と交流するにあたり、形式的ながらも君臣関係を結んだ国のことだ。冊封国と呼ぶのが正しいかもしれないが、既存の言葉が意味しているそれに比べると、もう少し緩やかな関係であった。

「確かに我々の世界にも数多の国があったね。それで？ その国がどうしたって？」

「今、その国の王女が来ている」

「ここにかい？ 王女が？ そんな約束、予定に入れていたかな？ それとも今日の招待客リストに載せ忘れたかな？」

グレンバーは首を傾げ担当秘書を振り返った。

すると手乗り妖精の秘書は慌てて手元の書類を確かめると、頭を振ってそんな予定は入っていないことを告げた。

執務の類は秘書たる彼女の手でしっかり管理されている。人間というのは時にミスをする。グレンバーだけなら誰かと交わした約束を失念してしまうこともあるが、彼女と二人で管理していればその可能性は限りなく少なく出来るのだ。

するとアー・ド・モアが言った。

「本日の参加者名簿にもないよ。向こうがこちらの都合も考えずに一方的に押し付けてきたんだ」

「なんでまた？ まさか招待もされてないのに宴に参加させろと言ってきたのか？」

こうした催しを開くと、時折そういう人物が現れる。自分に招待状が届かないはずがない。主催者がお茶目にも招待し忘れただけなのだと思い込んで、お呼びでないのにやってくるのだ。その手の人物に丁重にお引き取り願うか、親しみを込めて迎え入れるべきかは、その都度判断しなければならない。

「いや、それもない。そもそも今日宴を予定していること自体知らなかったみたいなんだ。だから平服で来ている。詳しい事情はもちろん聞いてないけど、そのあたりは本人に直接尋ねたほうがいいかもしれないね」

「一国の王女がわざわざ訪ねてきたのなら、門前払いする訳にはいかないよね？」

「もちろんさ。ただし最終的に決定するのは閣下だけだね」

言いながら参事官は、その選択が得策ではないと仄めかしていた。もちろん大使は親友の意図に素直に従った。

「まだ、宴が始まるには時間があるから、それまでに済ませてしまおう」

「分かった。では王女を応接室に案内しておくよ。少ししたら来ておくれ」

アー・ド・モアはそう言うと言った。

こうして帝国の駐日大使グレンバー・ギ・エルギン伯爵の前に、ピンク色の髪をした女性と黒い服の少年従者が立つことになったのである。

「初めまして、大使閣下。本日はプリメーラ殿下をご紹介します」

黒衣の少年が恭しく礼をして、プリメーラを紹介する。その姿に、グレンバーは目を瞠った。若々しい『少年』の美貌に、心を奪われたのだ。

「ようこそおいでくださいました、姫殿下。……じゅ、従者は……ご苦勞である」

グレンバーは宮廷儀礼に従い、アヴィオン王国の王女に恭しく一礼した。

一国の王女ともなると、どれほど小国でも伯爵に過ぎないグレンバーからすれば上席になる。相応の礼遇をするのが文明国としての振る舞いなのだ。

薄桃色の髪の女性には、軽く顔を伏せたまま答礼した。

王女はグレンバーと目線を合わせようとしない。僅かにグレンバーの耳に視線を走らせると黒髪の少年に囁いた。

「大使閣下。プリメーラ姫殿下はこうおっしゃっておいでです。何やら宴の準備中だった様子。そんな中に突然押しかけてきたわたくしの非礼を咎めるどころか、このようにご親切にいただき、本当にありがとうございます、と」

「いえ、帝国の大使館は一国の王女の前で閉ざす門扉もんびを持ち合わせておりません。それに貴女のような美しい女性ならばなおさらです。もちろん健気な従者である君もだ。君の名前は？」

グレンバーは少年を見据えた。

「名乗るのが遅れました。私はオー・ド・ヴィと申します。アヴィオン王国王女の侍従です」

「して王女殿下、本日は一体どのような御用向きですか？」

グレンバーはプリメーラが顔を上げるのを期待したが、彼女は何故か伏せたままであつた。

代わりに少年が答える。

「実は昨日からしばらくの間、ニホンに滞在することにいたしました。その旨のご報告と相談事をしたいと思ひまして」

どうやらアヴィオンという国では王族は直接話をしないものらしい。そういう風習の国もあるのかと理解したグレンバーはプリメーラに椅子を勧めた。

プリメーラが腰を掛けるとグレンバーは自分も座った。

「相談事とは何でしょうか？」

「実は、この国の為政者をご紹介いたしたいと思つています」

あらかじめ打ち合わせは済んでいたのだろう。黒衣の少年は、姫の耳打ちを待たずにどんどん話を進めていった。

「紹介……ですか？ それは一体どういう御用向きによるものでしょうか。お話によっては承れることと承れないことがございますので、差し支えなければ理由を教えてくださいませんか？」

そこでオー・ド・ヴィが、ティナエ共和国が海賊の出没によって苦しめられていることを簡単に説明した。プリメーラがこの問題の解決に、日本の助けを得たいと考えている、と。

「つまり海賊をニホンに退治して欲しいとおっしゃるのですか？」

「端的に言えば、その通りです」

「それはアヴィオン王国の正式な意思ですか？」

プリメーラが頭を振り、オー・ド・ヴィが続ける。

そもそもアヴィオンという国はいくつかに分裂しており、現在は国の体を成していない。王室もプリメーラが最後の一人である。今のプリメーラは分裂した祖国のうち、ティナエのために行動している、と。

「では伺い直します。姫殿下のご意思は、ティナエ共和国を代表しているのですか？」

「いいえ。しかしながら姫殿下の父君は、ティナエの統領。殿下のご決心に反対なざることはないでしょう」

「それはどうでしょうか？」

グレンバーは唸った。

外交は詭道だ。下手をすると、国を滅ぼすことにもなりかねない危険な道だ。だから

軍事と同じく感情の入り込む余地は全くなく、人間の命ですら取引きの材料としてしまう冷徹さが必要となる。

歴史を振り返れば、当面の苦境を脱するために外国の兵を引き入れて国を乗っ取られた例は枚挙の暇がない。一国の代表者が海外から軍を引き入れることを、自分の娘のしたことからおいそれと承認するとはとても思えないのだ。

「ティナエはそこまで苦しんでいるのです。もしニホンが介入を決意してくださるなら父はきっと喜んで迎え入れるでしょう」

「甘いですね」

グレンバーはティナエの統領が姫と意思を同じくしているどうか分からない上に、日本が、頼まれたからと言って「はいはい」と簡単に援軍を差し向けてくれるような国ではないことを告げた。

「難しいことは承知しています。それでも何とかならないか、試みてみたいと思っていますのです」

「なるほど、それでこの国の為政者と接触したいという訳ですね？」

グレンバーは難しそうに唸った。

そして指先でソファアの肘掛けをしばらく叩きながら考えると、急に表情を変えた。

**立ち読みサンプル
はここまで**

「よいでしょう。ご紹介いたします」

「!?」

突然顔を上げるプリメーラ。だがグレンバーと視線が合うと、何かに怯えるように目を伏せてしまう。

「ちようど、本日の宴に日本の議員がおいになる予定です。ご紹介しますので相談してみるといいでしょう」

「よいのですか？ 招かれている訳ではありませんのに」

自ら口を開いたプリメーラの声は本当に小さかった。

「よいのです。今、この場でご招待申し上げます」

「ああ、本当にありがとうございます」

深々と頭を下げた姫は、何か怖いものでも見るかのように恐る恐る視線を上げた。

だがグレンバーと目が合うと、見てはいけないものでも見たかのように顔を伏せてしまう。そしてまた勇気を奮い起こして顔を上げる。終始そんな感じである。

グレンバーは気付いた。この姫は他人と目を合わせることを恐れているのだ。

「別にお礼など結構です。私がすることは、本当にこの国の政治家を姫殿下に紹介するだけなので。その上でどのように交渉するかは貴女次第。しかしながらこれが後

悔する結果へ繋がらなければよいと危惧しております」

「ご心配に感謝します。しかし大丈夫です。全て承知しておりますので」

「ご配慮をお祈りします。ではここでしばらくお待ちください」

グレンバーはそう言って応接室を後にしたのであった。

やがて客達が集まってきた。

宴席には料理が並び、凜々しく制服をまとった騎士団の女性達があちこちで談笑している。その間を妖精や垂人女性達が給仕しているのだ。

会場に案内されたプリメーラは壁際に立つと、宴席に集まってくる来賓を眺めていた。

「オー・ド・ヴィ……わたくし、服装が地味ではないかしら？」

集まってくる日本人客のほとんどは盛装であった。

この手の催しでは、相応の服装をすることが求められる。

例えば、合衆国海兵隊創立記念式典では、列席する男性は基本的に蝶ネクタイをすることが求められる。式典が陽の出ている間ならモーニング、夜会ならタキシードといった感じで時間によって装いを変える必要があったりもする。社交の場とは、背広一つで通用するような甘い世界ではないのだ。当然、女性に関してもアフタヌンドレス、イブニングドレスといった相応の配慮が必要だ。